

# 大津祭

近江には、多くの祭りがあります。いずれの祭りも、その土地に住む人々の生活に根ざしています。なかでも豪華な曳山が、コンチキチンの囃子によって大津町中を巡行する大津祭（四宮祭）は、長浜の曳山祭・近江八幡の左義長と並んで湖国三大祭の一つに数えられています。

## 曳山の発生

大津祭は、大津市京町三丁目に鎮座する天孫（四宮）神社の秋の祭礼です。この祭礼は毎年10月9日が宵宮。各曳山町では曳山にのせる人形や見送りを飾り、道路には赤提灯をつけた曳山が並べられます。その翌日の10月10日が本祭です。当日午前8時半ごろには天孫神社横に勢揃い。そのあと神社前で一基ずつ「くじ改め」の儀式が行われたのち、西行桜狸山を先頭に、各曳山が終日、町々を巡行

します。

この祭りがいつごろ始められたかは不明ですが、祭礼に曳山が取り入れられた時期は、近世初期の慶長～元和年間(1596～1624)といえます。

最古の「曳山由来書」によりますと、最初は祭りの当日、神社の近くの鍛冶屋町に住む塩屋治兵衛という人が、神をなぐさめるために狸の面をかぶり踊ったところ賑わったので、町内相談して造り物屋台をつくる。元和8年(1622)から狸の腹鼓をうつからくりを作りかつぎ歩いてきたが、寛永12年(1635)、それに地車をつけて引いたということです。

そして、曳山は同時につくられたのではなく、14ヵ町で順次製作されました。すなわち、寛永12年の鍛冶屋町の狸山を最初に、最後の安永5年(1776)の上京町の鳳凰山（のち月宮

殿山）までおよそ141年間を要しています。

この曳山の製作年代は、他の地方都市の著名な曳山祭礼と比較して、时期的にかなり早いことは注目すべきものだと思います。この背景には、大津が近世において湖上交通による港町ならびに東海道の



西行桜狸山を先頭に勢揃いした大津祭曳山（京阪電車通り）

### 大津祭の曳山の名称

曳山名	曳山町名
西行桜狸山	鍛冶屋町
狸々山	南保町
西王母山 (桃山)	丸屋町
西宮姪子山 (鯛釣山)	白玉町
殺生石山 (玄翁山)	柳町
湯立山	玉屋町
郭巨山 (釜掘山)	後在家町 小唐崎町
孔明祈水山	中堀町
石橋山 (唐獅子山)	湊町
龍門滝山 (鯉山)	太間町
源氏山 (紫式部山)	中京町
神功皇后山	狛師町
月宮殿山 (鶴亀山)	上京町

宿場町として繁栄をとげ、その豊かな経済力があってからだといえましょう。

### 曳山とねりもの

大津祭は、いまのべてきましたように最初から14基の曳山だけではなかったのです。曳山とともに「練物」、すなわち造り物による仮装行列がありました。

元禄4年(1691)の「曳山練物番列」に

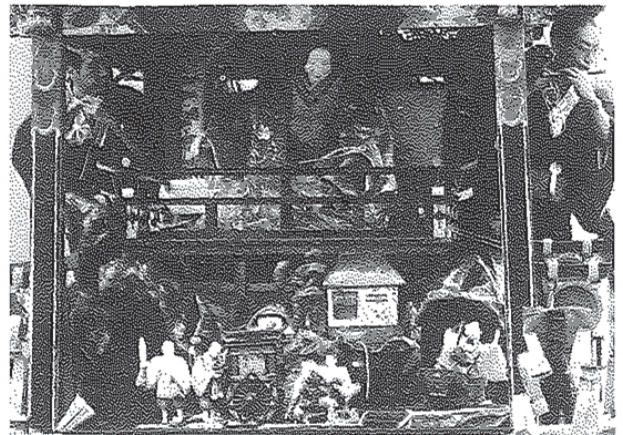
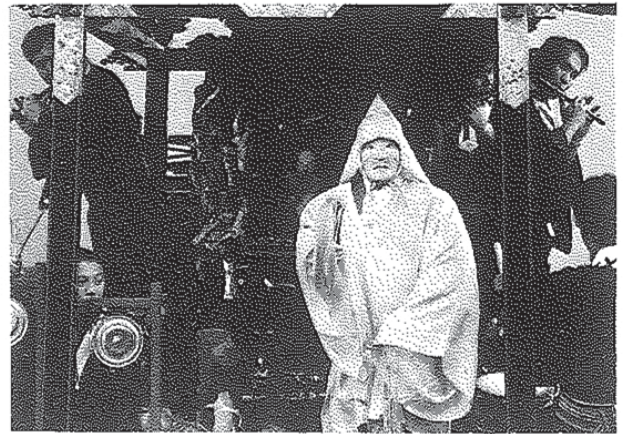
よりますと、そのときすでに曳山をもっていた町が8ヶ町、ねりものが17ヶ町、合計で25ヶ町が祭礼に参加していたわけで、現在の倍近くになります。

それぞれ趣向をこらしたねりものや曳山の巡行は、さぞ華麗であったことと思います。江戸中期の記録に「その行粧京祇園会にかつて劣らず」とあるほどです。しかし、単純な仮装行列的なねりものから豪華な曳山へ替わったり、その他は次第に消滅してしまいました。

### からくり戯

大津祭の特色の一つに「からくり」があります。からくりは一般的に仕掛け装置のあるものをさします。このからくりそのものの歴史は古く、京都ではすでに室町時代には、からくりの人形が風流踊に登場していたのです。のちに見世物化した「からくり芝居」として発展もしました。江戸時代には、このからくりが祭礼の曳山屋台に登場してきたわけです。

大津祭では、10月10日に各曳山町や町の辻つじなど、およそ20数ヶ所でからくりが実演されます。まず「ショウモン(所望)」の声がかかるとからくり囃子に替わり、二層式の曳山屋台で人形をはじめとする種々のからくり



上から殺生石山、源氏山、龍門滝山、湯立山の各からくり戯

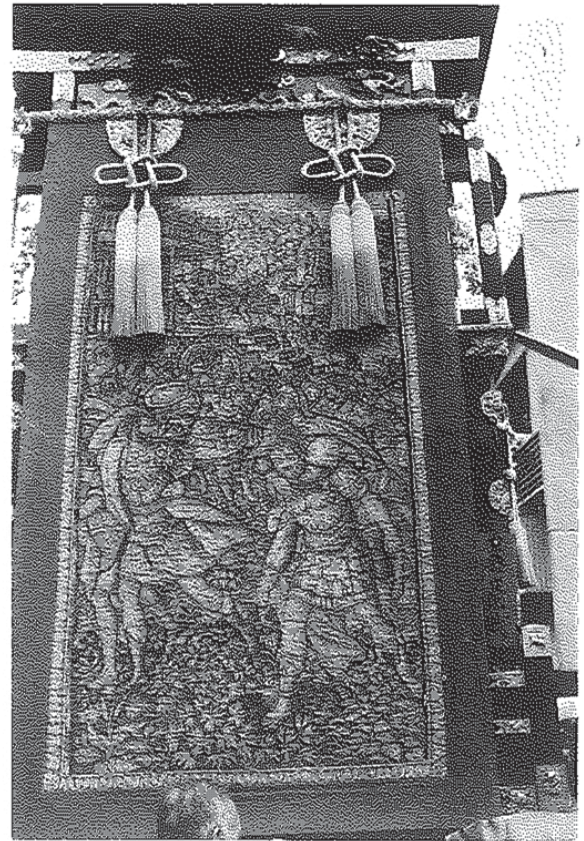
が披露されます。曳山の名称にちなんだからくりは、いずれも精巧で観る人を楽しませてくれます。

ところで、大津祭においては、先にものべましたように狸が腹鼓をうつからくりの造り物をしているので、祭礼の初期の段階から、からくりの導入をはかっていたことがわかります。これは全国的にも古く、現存のからくりでも享保3年(1718)の在銘をもつ中京町の源氏山の紫式部人形は、二番目に古いとされています。

ここで、曳山屋台で演じられるからくりの事例を二、三紹介してみましょう。まず太閤町の龍門滝山(鯉山)。鯉の滝登りのからくりになっています。すなわち曳山屋台の中央に大きな滝組みがこしらえてあり、その真中に滝の走行台があります。金色塗りの大きな一匹の鯉が、囃子に合わせて滝を登りかけ、ちょうど半分登ったところから口の開閉と左右の鱗と尾を交互に動かしながら数回上下し、滝を登り切ったところで鯉に翼を広げて、雲の中に消えるという趣向となっています。これも一人の手であやつられるのですが、鯉に内蔵された仕掛けがうまく合致し、すぐれたからくり戯をつくりあげています。鯉を主題にした曳山は多いですが、鯉自体がからくりになっているのはこれだけです。

次いで中京町の源氏山(紫式部山)です。曳山屋台につくられた壇上には、紫式部が巻紙に筆を走らせながら源氏物語の想をねっています。その目の前に岩山の造り物があり、その左下にある岩穴から汐汲みの男女、帆掛舟を船頭がこぎ、御所車を牛が引き、時代衣裳をした七体の人形が、廻り舞台のように回転しながら順次姿をみせます。さらに岩山のほぼ中央に水車小屋・松の木が出没して風景をかえます。

このように源氏山の一つの屋台のなかで筆を走らせる紫式部人形、風俗人形の廻り舞台、背景の景色の変化といった三つの趣向を立体



(ベルギー製の見送り 月宮殿山)

的にみせてくれます。

このほか、桃が二つに割れて唐子衣裳の童子が生まれてくる西王母山、女官姿の顔が狐に変顔する殺生石山、鍬で地中を掘り金の釜をほりあてる郭巨山、男女二体の人形が鶴亀の舞をみせる月宮殿山、弓で岩に文字を書く神功皇后山、えびすが鯛をつりあげる西宮蛭子山、酒をのむと顔が赤くなる猩々山など13基の曳山には、それぞれ風流化された所作の巧妙さと発想に富んだすばらしいからくりがあり、現在、大津祭の大きな見所となっています。これだけのすぐれたからくりが完全に残され披露されているのは、もちろん近畿で大津祭だけです。

大津祭にどのような径路でからくりが導入されたかは、明らかではありませんが、室町時代からのからくり人形の存在していた京都の影響をうけたことは容易に想像できます。ただそれをまねるだけでなく、江戸時代の興行のきざしをみせていたからくりを、いち早く曳山に取り入れ、大津祭の独自性を出そうとしたところに、大津町人の進取の精神がよ

みとれます。

### 装飾具と天井画

からくりと並んで、曳山屋台の装飾も大きな見どころとなっています。曳山町の町人たちが力を注いだのは、曳山を飾る幕類、すなわち曳山の後部につける見送り、周囲をめぐる銅幕、水引などです。これらを各町競って豪華な毛綴錦・唐織などをあつらえたり、購入しています。

たとえば、中堀町の孔明祈水山では、明和5年(1768)綴錦幕四枚を金140両で購入。中京町では嘉永4年(1851)に京都菊水鉾町から金150両で花鳥綴の見送りを譲りうけています。また、太間町と上京町の両町は、ベルギー製の毛綴の見送りを多額の費用で京都から購入し曳山を飾っています。これは優秀な工芸品として国の重要文化財に指定されています。

さらに、幕類とともに見逃せないのが曳山の屋根裏の天井板であります。これはあまり目立たないのですが、江戸時代に活躍した著名な画人が彩筆し、いまもすぐれた画跡を残しています。

殺生石山には、江戸後期の四条派の画人松村景文が梅・朝顔・藤など40種類の草花図を極彩色で描いています。源氏山は松村景文に師事した長谷川玉峰が、28種類の草花図を彩筆。神功皇后山にも江戸後期岩派の広瀬柏園が筆をとっています。このほか鳳凰図の西行桜狸山、菊の彫刻をした石橋山、28種類の草花の透彫の郭巨山など意匠をこらした作品が目につきます。

また、本祭の前夜にあたる宵宮には、曳山町の町家で飾られる屏風にも景文・玉峰・玉純・柏園などの名をみることができます。京都の祇園会に円山応挙・松村呉春、景文・与謝蕪村など当代一流の画人が参画していますが、大津町人もこれを意識して、当時の著名な画人の筆で大津祭を飾ったことがうかがわれます。



(写真は神功皇后山(上)、殺生石山(下)の天井画)

以上、大津祭のあらましをのべてきましたが、大津祭は大津町人の祭礼文化への積極的な姿勢を背景に、風流のからくりの導入や、意匠をこらした装飾具を配し、華麗な独自の曳山へと仕あげていったのです。そして、曳山を飾りひく側と、それをみる側とが一体となって大津祭が次第に定着し、伝統的な祭礼として現在まで継承されているといえましょう。大津祭は、いわば大津町人の文化の結晶といっても過言ではないと思います。

(大津市史編さん室 木村至宏氏提供)